

翻
訳

Charlotte M. Brane 著 『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その28)

堀 啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載二十八回目となるこのたびは、第三十四章および第三十五章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続き Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】「課題番号：24K0367021」による研究成果の一部である。

三十四章

エアリー卿がアールズコートに戻ってくるのは遅くなった。リントンの屋敷で要される改築には彼が思っていた以上の手続きが必要だった。彼がこのホールを離れ、この世で最も愛する人の前に姿を現したのはほぼ三週間後になっていた。

三週間の間は、だが何も起きなかった。ベアトリスは、心がすっかり弱り果てるまで日々が過ぎゆくのをなす術もなく眺め暮らしていた。彼女が彼から解放される日は程遠いようだった。

到着するや、エアリー卿は、美しい彼女の顔の変わりように驚いた。それでもまだその顔は彼を魅了した。彼は、彼女のそばを二度と離れないと断言しながら彼女の青ざめた顔に幾度も口づけしたが——彼女をどのように扱ってよいのか、他の誰にも分らなかった。

誰もがエアリー卿を好きだったので、皆が彼を歓迎し、この家族の輪は彼がいなくては完璧にはならないようだった。まさにその夜、彼はアール卿と話をし、できるだけ早く挙式することを許して欲しいと懇願した。彼はベアトリスから離れてとても辛かったことを告げ、彼女も顔色が悪く陰鬱に見えると考えていた。果たしてアール卿は、喜んで十一月に、あるいはおそらくは十月の後半にと言っ

くれるだろうか？

「娘が自分で時期を選ぶべきでしょうが」と、アール卿は言った。「どんなに日程を選んだとしても私は認めますよ。」

エアリー卿はベアトリスを待たせていた居間に戻り、アール卿の返事を伝えた。彼女は微笑んだが、青ざめた唇がずっと震えていることに彼は気づいた。

彼の情熱的な愛の言葉が至高の音楽のように聞こえたのはたった一月前だった。彼女は彼の言葉を聞いて、自分らしく見えるようにと努めたが、その心は漠然とした言葉にならない恐怖で冷えきっていた。

「十月十四日にしましょう。」——彼にしかわからない、ある種の計算方式を以て、聡明なエアリー卿はそれが「十月の後半」であると主張し、ベアトリスを説得した。

「もう言葉はいりません」と彼は明るく言った。「アール卿のもとに行つて、そう話します。ご婦人方がよくなさるように、後になつてから心変わりした、などとは仰らないでください。ベアトリス、どうぞ仰ってください、『フルベルト、私は十月十四日にあなたと結婚することを約束します』と。」

彼女はそれを繰り返した。

「ほぼ冬になるでしょう。」と彼は付け加えた。「花は枯れてしまふでしょうし、木々の葉も落ちてしまふでしょう。でも私にとつては、どんな夏の日よりも明るく輝く日になります。」

彼がその部屋を離れるのを見て、彼女は長く低いうめき声を漏らした。本当にそうなるだろうか？彼女は窓のそばに寄り、木々を眺めた。あの緑の葉が落ちた頃、彼女はエアリー卿の妻になるのだろうか、あるいは、恥辱と悲しみの暗い雲がかかり、彼女を彼の視界から永遠に遠ざけてしまうのだろうか？

ああ、もっと慎重であつたならば！一度は、素晴らしいものと思えたロマンスは、何とつまらない馬鹿げた不快なものであつたことか！もし全てをアール卿に打ち明けてさえいれば！

今では遅すぎた！だが死のような恐ろしさが心を占めているにもかかわらず、ベアトリスはまだ希望の光を感じていた。希望は人々の胸に最後まで宿るもので——まだ彼女の中にも残っていた。

少なくともその夕べ——それはエアリー卿が戻ってきた最初の晩だが——彼女は幸せだった。彼女は、暗い雲を押しやり、忘れ、恋人と共にいる時間を楽しんだ。彼は彼女が微笑みを浮かべるのを眺め、彼が愛するあの明るく口調を耳にした。明日はなるようになれ、その夜、彼女は幸せだった。そして彼女は自分の言葉通りに自分らしく振る舞った。

エアリー卿は後に、その夜が人生で最も楽しい一夜に数えられるものだったと振り返った。彼が愛してやまなかった彼女の美しい顔には何の陰りにもなかった。ベアトリスは生命力と活気に溢れていた。彼女の明るく楽しい言葉は、聞いているすべての人を魅了した。ライオネルでさえ、妬みを忘れ、かつてないほど彼女を賞賛した。

アール卿は微笑んで、——本物の医者がついに現れたからには、孫の健康を案ずるのは全く無用なことですよ、とレディー・ヘレナに語った。

エアリー卿が、ベアトリスにおやすみなさいを告げた時、彼は彼女の、宝石の指輪をはめた白い両手をとって身をかがめた。

「あなたといるといつも時間を忘れてしまいます。」と彼は言った。「アールズコートに戻ってからまだ一時間しか経っていないように思えるのです。」

翌朝、彼女が恐れつつ予期していた手紙が届いた。

そこには、ヒューが最初に書いてきていたような情熱的な愛の言葉はなかった。彼は、答えを聞く時が来た——彼女の約束がいつ履行されるのかを彼女自身の口から聞かねばならず——それは、彼女がいつ彼の妻になるのかというものだった。

自分はもう待つつもりはない。例え争いになっても構わず、自分はその争いに勝つだろう。ただし平和的に解決できるのなら、それはずっと良いことだ。いずれにせよ、自分はこの中途半端な状況に耐えられず、彼女はどうするつもりなのかをすぐにも知る必要がある。これ以上、約束を信じるつもりもない。まさにその夜、自分はアールズコートに来て、彼女に会うことにする。だが自分の権利を行使するにしても、むやみに彼女を苦しめるつもりはない。彼女に会って、今後の行動の計画を立てるまで自分は彼女の父に会うつもりはない。

「私はアールズコートの敷地をよく知っている。」と彼は書き綴っていた。「三週間前、幾夜も歩き回ったからだ。庭園から植え込みにかけて細い小道がある——そこで九時に待つ。それならば暗いだろうし、あなたは人に見られる心配をしなくていいだろう。ベアトリス、覚えていてくれ、今夜九時に私は必ずそこに行く。そしてもしあなたが来なければ、あなたに会うために邸内にあなたを探しに行く。」

手紙は彼女の手から滑り落ちた。恐ろしさと恥ずかしさから来ず冷たい一撃が彼女を崖っぷちに追いやった。憎しみと不快感が彼女の心を満たした。このような男の力の前に彼女は屈さねばならないのだろうか！

ついに彼女は打ちのめされた。彼女は自分の恥辱と恐怖とに向き合った。どうしてヒュー・ファアーナリーに会うことができようか？

そんな風に出会ってみたところでどのような結果が得られるだろうか？ただ彼をより怒らすだけだろう。挨拶のためにでさえ、彼に手を握らすことなどあつてはならない、と彼女は自らに言った。そして彼女の軽蔑に彼は耐えられようか？

彼に会ってはならない。断じて。どのようにして時間を稼ごう？エアリー卿は決して彼女の傍を離れなかった。彼女はヒューに会うことはできない。クモの糸が彼女を絡め取るうとしていているようだが彼女はそれを打ち破り、外へ逃れ出るのだ。

体調が思わしくないからと彼に手紙を書いて、少し待っていて欲しいと頼もう。敵しい言葉を書き連ねているが、彼女が丁寧に書けば彼がそれを断れないことを彼女は知っていた。そうでなければ、彼女は逃げてしまわねばならない。全てが失敗に終わったら彼女は彼から逃れる術がなく、彼女は家を離れるしかない。どんなことあつても彼に囚われることがあつてはならない——それよりは死ぬほうがましだ。

一度ならず彼女はギヤスパーの言葉を思い出した。彼は誠意があり、とても勇敢で——彼女のためには死さえ辞さないだろう。ああ、彼が彼女を助けてさえくれれば、助けて欲しいと彼に頼むことさえできれば！自分自身の行いによって彼女が陥った窮境は、どんな人の助けも及ばないものだった。

彼女は——自身が決意したことを手紙に書くことにした。だが誰

がこの手紙を引き受けてくれるだろう？もし使用人の誰かに頼んだら、彼女に鉄の杖を振り下ろすかもしれない相手にその秘密を明かすことになる。それは彼女のプライドが許さなかった。この世でたった一人、彼女を助けてくれる人物はいた。それは妹のリリアンだった。

妹にこの話をする事の恥ずかしさに、彼女は躊躇した。遠い昔、ナッツフォードにいた頃、彼女はこの話を妹に少しいかけて彼女にシヨックを与えてしまい、その時の妹の怯えた、驚いた表情が忘れられなかった。それはどんな言葉よりも恥ずかしいことだった。だがそれができさえすれば、リリアンの同情から慰めが得られるのだ。リリアンは手紙を引き受けてヒューに会ってくれよう、そして彼女が病気だと伝えてくれるだろう。実際に彼女は気分が悪かった。彼がリリアンに会えば、気持ちも収まるだろう。他に策は考えられなかった。その夜、妹に話そう——そう思うだけで彼女は気持ち安らいだ。

夕食の時間のかなり前、レディー・ヘレナはベアトリスの姿を探していた——あの子の花嫁衣裳をロンドンにオーダーをする時期だわ、と彼女はつぶやいた。そしてそのオーダーのリストはすぐに作成せねばならなかった。

彼女はレディー・ヘレナの部屋でおとなしく座り、祖母の言葉を書きとっていたが、その間中ずっと、リリアンにどのように切り出すべきか、この恐ろしい過ちを犯したことについてどう説明すれば

彼女がよく理解してくれるか、そしてできる限り彼女を助けてくれようとするだろうか、と考えていた。アール卿夫人はモーニング・ドレスのレースと縁飾りと宝石類について話をしていたが、その間ベアトリスは自分がすべき告白の一言一句を考えていた。

「これで良いでしょう。」と、レディー・ヘレナは微笑みながら言った。「とても詳しく話したつもりですが、無駄にならないか心配です。私が言ったことを聞いていましたか、ベアトリス？」

彼女は真つ赤になり、あまりに当惑しているようだったのでレディー・ヘレナは笑いながら言った。

「もう行ってよろしいですよ——恥ずかしがらないで。ずっと昔、私自身も恋をしていた頃は今のあなたと同じように他のことは何も考えられませんでしたから。」

リリアンはなかなか見つからなかった。だがとうとう書齋で、ミスター・ダッカーと共に、古い美しい絵を眺めているのが見つかった。ベアトリスが妹に少し時間を欲しいと頼むと、彼は素早く彼女を見上げた。

「行つてはなりませんよ、リリー。」彼は冗談めかして言った。「ウエディングドレスについての何かつまらない話でしょう。このフオリオの絵を見てしましましょう。」

だがベアトリスが彼に陽気な返答をすることはなかった。笑おうと努めていたが、彼女は深刻に見えた。

「あの若い女性は本当に不可解だ。」と、書齋のドアが二人の姉妹の後ろで閉ざされるのを聞きながら、彼はひとり言を言った。「彼女には何か心配事があるようにさえ思える。」

「リリー」と、ベアトリスは言った。「あなたの助けが必要なのだ。ライオネルから引き離してごめんなさい。あなたは彼と一緒にいたかったです。」

妹のきれいな顔は紅潮した。

「でも、ねえ、私にはあなたが必要なの。」と、ベアトリスは言った。「ああ、リリー、私はとても困ったことになっているの！あなた以外に私を助けてくれる人はいないの。」

ベアトリスが私室としていた小さな居間に彼らは揃って入った。彼女は妹を窓際にある、ゆったりと楽なラウンジチェアに座らせ、その足元に半ばひざまずくように座った。

「本当に困っているの、リリー！」と彼女は叫んだ。「あなたにどのように話したらよいのかわからないと思っっている、この私の現状から察してちょうだい。」

きれいな優しい瞳が彼女の目を覗き込んだ。ベアトリスは妹の両手を握りしめた。

「どうか性急に私を判断しないでね。」と彼女は言った。「私はあなたのように善良ではないの、リリー。私は決してあなたのように忍耐強く、優しくもいられなかった。ずっと昔、ナッツフオードである朝、例の崖の上にあなたがいるのを見つけて、私は自分の生活が嫌いだとあなたに話したことを覚えている？ 私は本当にあの生活が嫌だったの、リリアン。」と、彼女は続けた。「それがどれほどのものだったのか、あなたにはわからないでしょう。あの静かで単調な生活は、私を殺しかけていたわ。私は過ちを犯した。だけれど咎められるべきは、私をあんな生活に追い込んでいた人たちなのよ——本来のように世間の多くの楽しみを与えてくれる代わりに、私を世間から隔離したあの人たちが。私が何をしてしまったのか、あなたになかなか話すことができないわ、リリー。」

彼女は美しい悲しげな顔を妹の手の上に伏せた。リリアンはそんな彼女の上に身をかがめ、自分がどんなに姉を愛しているか、そして姉を助けるためにはどんなことでもしようと思っているか、囁いた。

「まさにあの朝」と彼女は決して妹のほうに視線を上げずに語った——「あの朝、リリー、私は見知らぬ人に出会ったの——紳士のように見えたわ——彼は私を賞賛の眼差しで見つめたの。再び会った時、彼は私に話しかけてきたわ。あの長い牧場の横を、彼は私の

隣を歩きながら、彼がこれまでに訪れた外国の不思議な話を語って聞かせたわ——とても不思議な話を！ 私は彼が見知らぬ他人だということを忘れて、今あなたに話しているように話していたの。私は彼に何度も会ったわ。やめて、私から顔を背けないで。あなたが私から去ってしまったら私は死んでしまうわ。」

優しい腕が彼女をより強く抱きしめた。

「あなたから顔を背けたりはしないわ。」とリリアンは答えた。「今ほどあなたは愛していた時はないわ。」

「私は彼に会っていたわ」と、ベアトリスは続けた。「毎日、誰も知らない間に。彼は私の美しさを称え、私は喜びで満たされたの。そして彼は愛について語り、私は怒ることもなく聞いていたわ。誓って言うわ。」と、彼女は言った。「私は何も考えずにいたの。とても目新しく、彼自身ではなく、甘い言葉と賞賛が私には嬉しかったのだと思っているわ、リリー。私は彼のことはほとんど考えなかった。彼は雄弁で、私が不思議な話にどれほど憧れているかに気付いて、私が息吐く暇もないほど魅惑的な冒険物語を語って聞かせた。彼が語る不思議な物語について考えるうちに、彼のことは見えなくなっていた。リリー、実在の世界から私を遠ざけていたあの人たちが、多科の科を受けるべきよ。もし私がこの家で、ふさわしい扱いを受け、多くの人々に出会うことができ、正しい判断を下すことができているならば、こんなことは起こらなかったわ。最初は言葉には言い尽せないほど惨めな生活の中での楽しい一時に過ぎなかった。そ

の後、日々お世辞を言われたり、称賛されたりすることを望むようになった。そうしないとやっていけないかったのよ、リリー。遂には、今あなたがしてくれているようにその男に私の両手を預け、私の顔にキスをさせ、彼の妻になるという約束をその男に勝ち得させた時が来たとあなたに告げたならば、あなたは私を抱きしめたまま気が違ってしまったのかしら？」

ベアトリスは視線を上げ、きれいな慈悲深い顔が雪のように白くなっているのを見た。

「あなたが思っていたよりも酷い状況かしら？」と彼女は尋ねた。

「ええ、もちろん。」とリリアンは答えた。「酷くて取り返しのない話で、恐ろしいわ。」

三十五章

しばらくの間、沈黙が続いた。そしてリリアンは姉の上に身を投げかけ、こう言った。

「ねえ全てを話して。恐らくあなたの助けになれるわ。」

「私は彼の妻になると約束したの。」とベアトリスは続けた。「もちろん本気ではなかったわ。私はただ子供だったのよ。そういうことが何を意味するか私にはわかっていなかった。彼は私の顔にキス

をし、私を自分のものにするために戻ってくると言ったの。信じて、リリー。私は結婚のことなど考えてもみなかった。外国の土地の素晴らしい情景で私の胸はいつぱいだった。私が大嫌いだっただ生活から逃れる手段としてしか、私はヒュー・ファナーリーののこを見ていなかった。彼は、私の心が驚きでいつぱいになるような名前の土地に私を連れて行くと約束した。あなたやお母様のそばを離れることなど思ってもみなかったし——この男を恋人だと思ったことも決してなかったわ。」

「では、エアリー卿を愛しているように、あなたが彼に好意を持っているというわけではないのね？」とリリアンが割って入った。

「私を苦しめないで！」ベアトリスは哀願した。「私は生涯でたった一度の愛を以て、フルベルトを愛しているの。あの男にあつたのは、私がああ頃の生活に耐えられるようにしてくれたお世辞と、私が彼に会おうと画策した時の興奮だけだった。」

彼は私に指輪をくれて、二年以内に必ず戻ってきて私を妻にすると告げたわ。彼は長い航海に出たわ、リリー。彼が去ってしまった私は安堵した——目新しさはもう失われていて——私は飽きていた私は彼の全てを忘れようとした。でも胸から追い払おうとした彼の記憶がいつも蘇ってきた。彼に戻ってくる事ができるとは私は思っていないかった。あれは単なる、ひと夏の気晴らしでしかなかった。その夏は私の人生に影を落とした。振り返ってみるとひどい過ちを犯したとわかった。私自身の責められるべきところは大きいけれど、

でも確かに世間から私を遠ざけていたあの人たちも責めを負うべきなのよ。」

「この私の話を通して、私はあなたほど善良でも、忍耐強くも、優しくもないことを思い出してね。あなたが満足していたエルムズで、私は籠の鳥のようにじっとしてはられないかった。私は虚栄心が強く、考えなしで、わがままだった。でもせつちちで、傲慢な子供時代を振り返ると、不思議な話に満ちた、荒々しい人生の奮闘に憧れ、変化や興奮や楽しいことを求めながらも、制約されたつまらない日々を送っていたことが少しは言い訳になると思うの。でもその後のことは弁解できないわ。お父様が私達に話をされたとき——あなたは覚えていてでしょう、リリー——あんなにも優しく、私たちのどちらかがそれまでの人生に何か秘密を持っていたのなら——全てを許すと約束するから隠しだてをしないようにと——あの時、私は全てお話しするべきだった。その過ちについては何の言い訳もできないわ。私は恥ずかしかったの。壁に並んでいた高貴な肖像画を眺め、とても誇り高く威厳に満ちたお父様のお顔を見上げた時、お父様の子が何をしてくだしてしまったのか言うことはできなかった。ああ、リリー、お父様にお話しできてさえいれば、今のようにあなたの足元にひざまずくこともなかったはずだった。」

リリアンは何も言わなかった。だがこの誇り高くうなだれた姿を、より一層自分に引き寄せた。

「あとともう話すこともできないわ」とベアトリスが言った。「口

にすると恐ろしいの。私の人生を破滅させるこの男は二年間離れていたの。戻ってくるよ、彼は私に彼の妻になるようにと迫ってきた。彼が戻ってくるなんて思ってもみなかった。私はとても幸せでそんなことは思う暇もなかった。」嗚咽が彼女の言葉を詰まらせた。

やがて彼女は続けた。「リリー、彼はこの土地にいるの。彼は私に呼びかけて、彼の妻になるというあの約束の履行を迫ってきたわ。」筆舌に尽くし難い恐怖が、この聞き手のきれいな憐み深い顔に表れた。

「三週間前、彼は私に手紙をよこした。私は彼を遠ざけようとしたわ。彼は今朝また手紙をよこし、必ず私に会うと言ってきた。今夜九時にここに訪れるの。ああ、リリー、助けて、私を助けて、でなければ私は死んでしまうわ！」

悲痛なすすり泣きが彼女の誇り高い唇からもれた。

「私は誰にもひざまずいたことなどなかったわ」と、ベアトリスは言った。「でも私はあなたにはひざまずくわ。ほかの誰も私を助けることはできないの。私のために彼に出会って、そして手紙を渡して、私がひどく体調が悪いと彼に告げて。嘘ではないのよ、リリー。私は具合が悪いの、頭は焼けるようだし、心は恐怖で凍りついてるわ。私のためにそうしてくれるでしょう？」

「それよりはむしろ私の命でも差しあげるわ。」と、リリアンは優しく言った。

「ああ、そんなこと言わないで、リリー！危機に瀕していることがわかる？お父様の言葉を覚えているかしら——もし私たちのうちの一人が嘘をつくという罪を犯しているか、秘密の恋愛をしているかが、明るみに出たら、たとえ胸が張り裂けそうになってもお父様はその娘をご自分から引き離して二度と会わないと仰っていたことを？ねえ、考えてもみて。アールズコートを離れて——私がとても愛しているこれら全てのすばらしい環境から遠ざかり、惨めな生活をエルクズで続けていく私のことを。お父様のお怒りに満ちた嘲りと、お祖母様のご心痛に私が耐えられると思う？あなたと同じようにお父様のことはわかっているけれど、お父様が私をお許しになると思う？」

「思わないわ」と、リリーは悲し気に言った。

「それだけではないの」と、ベアトリスは続けた。お怒りや軽蔑や貧乏な生活には耐えられるとしても、リリー、もしこの惨めな秘密が知られてしまったら、私はエアリー卿の愛を失うでしょう。最初に話していたら私を許してくださいかもしれない。でも彼は私が嘘をついたことと彼を騙していたことをご存知ないわ。彼を失うことはできない——彼のことは諦めきれない。お母様のため、そして私のために、助けてリリー。どうかお願いしたことを実行して！」

「もし私がそうしても」と、リリアンは言った。「たった数日の猶予が与えられるだけよ。何の解決にもならないわ。彼はまたここに現れるでしょう。」

「数日の間に逃れ出る方法を必ず考えるわ。」と、ベアトリスは切なそうに言った。「何が起きるわ、リリー。幸運は私にそれほど残酷なことはいらないでしょう。私から愛を奪うことはできないわ。もし自由になれなければ、私は逃亡する。エアリー卿やお父様に対峙するくらいなら、どんな苦しみにも耐えるわ。私の愛のために、私を助けると言って！私に愛を失わせないで！」

「あなたを助けるわ。」とリリアンは言った。「私の判断とは違っても——私が正しいと思うことは違っても——でもあなたの頼みを断ることはできない。その男の人に会ってあなたの手紙を渡しましょう。ベアトリス、ひとつ言わせてね。あなたは自分自身から逃げることはできないわ。私に見いだせる活路は一つだけよ——逃亡することはとても馬鹿げているわ——お父様とあなたの恋人に打ち明けることよ。あなたが生きていく以上に良いことはないわ。あなたの心臓の上には抜き身の刀がぶら下がっているのよ。あの方たちにお話しなさいな、そしてそのご親切を信じてみるのよ。少なくともその時はあなたの心は安らぎにみちるわ。あの方々が、彼があなたにつきまとうのを止めてくれるでしょう。」

「できないわ。」と彼女は言い、その唇から喘ぎが漏れた。「リリアン、エアリー卿が私にとってどんな存在なのかあなたは知らない

のよ。彼が怒っていた例はないわ。もしあなたが誰かを愛したことがあったならば、あなたにもよく分かるはずよ。彼は私の全てなの。どんな悲しみに耐えることになっても、例えそれが死であつてさえも、彼が私から冷たく顔を背けてしまうよりはましだわ。」

彼女はリアンの手を振りほどき、激しく苦い涙にくれながら床に崩れ落ちた。彼女の方に身をかがめていた妹には、哀れな言葉が響いた——「私の恋人、私の恋人！愛を失うことなんてできない！」

激しいすすり泣きがやむと、その誇り高い悲しげな表情は、落ちて着いた静かなものに変わった。

「私が何に苦しんでいるのか、あなたにはわからないでしょうね、リリー。」と彼女は控えめに言った。

「ねえ、私のブライドはズタズタに引き裂かれてしまって、秘密を抱えて辛い思いをして、人生を棒に振ってしまった人たちだけが私が何に耐えているのか分かるのよ。こんな苦しみがもう数日続いたら、ヒュー・ファナーリーから私は永遠に自由になれるはずよ。」

妹は、優しい言葉で彼女を宥めようとしたが、それは何の慰めにもならなかった。

「彼はここに九時に来るの。」と彼女は言った。「今は六時よ。私は手紙を書くわ。彼はあの植え込みの門に来るでしょう。私が何と

かして、あなたに時間が取れるようにするわ。私が書く手紙を彼に渡して、そして私が病気で彼に会うことができないと伝えて。怖いのでしょうか？」

「ええ。」とリアンは優しく答えた。「でもそれはいいのよ。私のことではなくあなたのことを考えなければならないの。」

「彼を恐れる必要はないわ」と、ベアトリスは言った。「哀れなヒュー、彼のことを憎んでいなければ憐れむことができたかもしれない。私の苦しみが全て拭われたらあなたに感謝するわ。今はまだ感謝できないの。」

彼女は、病気のために彼に会えない、という内容をほんの二言、三言、手紙に書いた。彼は満足するに違いなく、喜んでもう少し長く待つてくれるだろう。

彼女はその手紙を妹に託した。彼女の手と唇が震えているのに気づいた時、リアンの胸は痛んだ。

「秘密にしてほしいとあなたに頼まなかったわね、リリー」と、ベアトリスは悲しげに言った。

「その必要はないわ。」というのが端的な答えだった。

その日は、ハリ卿とレディー・ローレンスが、アールズコートで夕食を共にしていた。ワインの前に、それ以上ぐずぐずしていなかった紳士たちが居間に入ってきたのはほぼ九時前だった。その夕べは少し肌寒かった。明るい炎が火床で燃え、ランプは赤々と灯されていた。ハリ卿はレディー・ヘレナと共に、彼が最も愛するゲームのチェス盤の前に座っていた。アール卿は、レディー・ローレンスにエカルテを挑んでいた。若い人々はその部屋から引き上げた。

「二十年後には」と、ライオネルがリリアンに言った。「我々もカードゲームに逃げ込むかもしれませんが、今は音楽と月の光の方がより好ましいですね、リリー。私のために歌ってくださいませんか。さあピアノのそばにいらしてください。」

だが彼女は例の恐ろしい時間が近づいてきていることを覚えていた。

「ごめんなさい」と彼女は許しを乞うた。「また近いうちにあなたのために歌いますわ。」

彼は驚いたようだった。彼の頼みを彼女が断ったのはこれが初めてだった。

「例の彫刻画のフォリオを見てしまいましたでしょうか？」と彼は尋ねた。

一度、彼の隣に座を閉めてしまうと離れることは不可能だということを知っていたので彼女はこれも断った。

「あなたは何と後ろめたそうに見えることか」と彼は言った。「今、何か秘密を抱えていらつしやるのですか？あるいは例のウエディングドレスについて別の重要な相談でもあるのでしょうか？」

「しなければならぬことがあります」と彼女は曖昧に応じた。「あのフォリオを準備しておいてください——すぐに戻りますので。」

この短い会話をハラハラしながら聞いていたベアトリスがここで助け舟を出し、ライオネルに、メンデルスゾーンの三重奏曲を、彼の美しく澄んだテノールで聴かせて欲しいと頼んだ。

「私の『美しく澄んだテノール』は、きっと御意に召すことでしょう」と彼は微笑みながら言った。「リリーは今夜、私にとっても不親切なのです。」

彼らは、エアリー卿が待っているピアノのそばまで近づいた。そしてリリアンは——アール卿から贈られた——宝石入りの小さな時計を見て、九時まであと三分しかないのを知った。

リリーは人に気づかれずにすぐに部屋を出たと思っていたが、ラ

イオネルは彼女が出て行くのを見ていた。

彼女が引き受けたのが、どれほど不快な嫌な役目であったかを語り尽くすことはできなかった。もしこれを避けられるのなら、どんな苦しみでもまじだった。今まで秘密を持ったことなどなかった彼女、その全ての言動が陽の光のように隠し立てのないものであった彼女、致命的な伝染病であるかのように嘘や不誠実なことから身を避けていた彼女が、このような正しくない秘密の恋の話に巻き込まれてしまった！彼女は、姉の頼みをきくために、見知らぬ男に会おうと父の家を夜にこっそりと抜け出していくのだ。だが、姉の美しい顔に浮かんだ激しい悲しみと悲痛な声に響く酷い苦しみ、彼女をこの使命に駆り立てた。

リアンは自室へと急いだ。そして大きな黒いショールを取り上げ、それにすっぽりとくるまわってきれいな夜会服と真珠を隠した。そして例の手紙を手にとって、彼女の部屋から庭に続く階段を下りた。

その夜の闇は深かった。厚い雲が空を素早く移動し、風が気まぐ

「Écarté は十九世紀のフランス発祥のカードゲーム。二人で遊ぶことを目的とし、上流階級や宮廷で親しまれた。」

れな唸りを上げて高い木々の枝をあたかも怒っているかのように押し曲げ、その後には許しを乞うように木々の周りで囁いていた。リアンは夜に一人で外に出たことはなかった。そのため彼女が最初に感じたのは恐怖だった。秋の花々が枯れた庭を彼女は横切った。館の窓からは明るい光が漏れていた。植え込みは暗く、謎めいて見えた。彼女は静寂と暗闇に怯えながらそれでも勇敢に前に進んだ。彼はそこにいた。門のそばで、旅行着に身を包んだ背の高い姿を彼女は見つけた。彼女が小道を横切ると彼は急ぎ足に近づいてきて彼女が忘れることができない叫び声をあげた。

「ベアトリス、とうとうあなたは来た！」

「ベアトリスではありません。」差し出された腕から身を引きながら彼女は言った。「私はリアン・アールです。姉は具合が悪く、あなたにこれを届けにきました。」

(以下、次号)

堀 啓子

翻 訳

←

Charlotte M. Brame 著 『ドラ・ソーン (Dora Thorne) 』

(翻訳・その28) ←

←

堀 啓子←

←

A Translation of *Dora Thorne* by Charlotte M. Brame ②8←

←

HORI Keiko←